

図画工作科3年「河輪小のようせいを作ろう」

浜松市立河輪小学校 山本寛恵

1 はじめに

河輪小学校の子どもたちは、校内の畑や花壇で様々な植物や野菜などを育てている。近年は畑で綿の花を育てて収穫し、綿は校長室前に飾られていることもあり、普段から多くの子が綿という素材に触れる機会がある。とれたてのふわふわの綿の感触を、子どもたちはとても気に入っている。

3年生の子どもたちは図画工作科の様々な課題に大変意欲的に取り組む子が多い。しかし、自分の作品に自信が持てなかったり、固定観念に捕らわれて発想を広げられなかったりする子がいるのも現状である。

今回使用する素材の綿は柔らかく、伸縮性もあり、形を自由自在に変えられるものである。この素材のよさを生かすことで、子どもたちの想像力を働かせて自分なりの表現ができるのではないかと考え、本実践「河輪小のようせいを作ろう」に取り組むこととした。

2 実践

(1) 素材との出会い～綿と遊ぼう～

本実践では、まず、綿を自由に触って伸ばしたり、ちぎったり、丸めたりすることを通して、「綿は様々な形に変化することができる」ということを体感させた。次に、水彩絵の具を使って綿に着彩することができることを伝えると、初めは単色で染めていた子どもたちが、段々と色を混ぜて染めたり、部分的に色を変えて染めてみたりし始めた。カラフルな色に染めた綿を積み上げてアイスクリームを作ったり、綿を長く伸ばしてへびを作ってみたりする子もいた。

この活動を通して、綿は色々な形や色に変化させることができる面白い素材であるということをも十分に体感することができた。

(2) 河輪小のようせいを作ってみよう

綿との触れ合いの時間で、色や形を変化させることの楽しさを味わった。すると、子どもたちから「このカラフルな綿で人形を作りたい」という声が挙がった。そこで、「小学校のいろいろな場所に隠れていそうなようせいを作ろう」と、子どもたちに投げ掛けた。すると、「畑にいそうなようせいがいいな」「藤棚の上でいつもみんなを

見ているようせいにしようかな」など、子どもたちから様々な考えが次々に出てきた。それらの考えをはっきりさせるために、まずは、アイデアカードを作った。カードには、「どこにいる」「どんな形や色をしている」をしっかりと書くように伝えた。A子は、「藤棚にいるようせいだから、藤の花の色にしたい」と考えた。B男は、「プールにいるようせいで、ビート板の色に合わせて体の色を変えたい」と考えた。アイデアカードを書く中で、どんなようせいにしたいのかが練られ、ようせいの色や形も自然と定まってきた。

その後、綿を配ると、すぐに色を付ける子、形を作る子など様々であった。アイデアカードに書いたものに近づけるために、何色も混ぜたり綿と綿をくっ付けたりする子も見られた。製作途中で友達作品を見合ったり、相談したりする時間も設けると、「立っているようせいと座っているようせいと、どっちがいいかな」「ベンチにいるんだから、座っている方がぐらぐらしないでいいんじゃないかな」など、アドバイスをもらう様子が見られた。

(3) ようせい達と遊ぼう

最後に、仕上げたようせいの作品を鑑賞する場を設けた。製作途中から、子どもたちから「ようせいをそれぞれの場所に連れて行ってあげたい」という声が挙がっていたため、ようせい達に名前を付け、校内の様々な場所へ連れて行き、みんなで鑑賞会を行った。実際の場所に作品を持って行くことで、子どもたちの気持ちがさらに高まり、「やっぱりかわいいね」「百年山と同じ色だね。おそろいだ」など、楽しそうな感想を聞くことができた。もっと多くの人にも見てもらうために、廊下に河輪小コーナーを設け、写真と共に展示をした。ラッピング袋に入れて展示をしたことで、それぞれのようせいたちの空間ができ、見栄えもアップした。

3 成果と課題

綿という自由自在な素材を用いてようせいを作ることは、子どもたちにとって楽しみながら自分の表したいものを形にすることができる最適なものであった。変化を加えやすい身近な素材で、身近な場所と関連させた作品を作ることや、色や形にこだわりを持たせることで、子どもたちの想像力を高め、自信を持って表現活動を楽しむことができた。

しかし、ようせいを作るということにこだわりすぎて、作品が平面的で、立体作品と呼ぶには難しい作品になってしまった子もいた。多方面から見ても楽しめる立体作品の面白さなどを子どもたちが感じられるような手立てや支援は、これからの課題である。